# アースフィアの博物学士（自称）

山際小道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アースフィアの博物学士（自称）

【Ｎコード】
Ｎ４９５１Ｕ

【作者名】
山際小道

【あらすじ】
異世界において魔獣を愛する趣味人の博物記。執筆中の『風と異邦の精霊術師』の世界での別ストーリーです。試験的な要素があるので見苦しくなる予定です。すみません＞＜

## 第1話（前書き）

試したいこととかをこちらでやってみることにしました。やることは先達のコピーなのですが、自分に合うかどうか？使いこなせるかどうか？といったところであります。

# 第1話

私は今、草原を全力で走っている。

「ペトラ！お前はもっと早いだろうが！先に行けっ！」

声を出すより呼吸したいのだが、そういう訳にもいくまい。

私と並んで走っている小柄な少女は、息も乱さず走っている。

「師匠を置いてはいけません」

チラリと眼だけを向けてすぐに前を向く。

「弟子を取った憶えはないっ！」

何度この台詞を言えば解かるのだろうか？

―キィッ！

背後から迫る魔獣の鳴き声。近い！

「二手に分かれるぞ？」

「嫌です」

「お前のためじゃない！観察のためだ！」

「カチンときます」

何を言っても聞きそうにないが、これも調査のためだ。説得を続けよう。

「良いか？私達が別れたらどちらを追ってくるかで、こいつの捕食

傾向が判明する！」
「・・・・・・」
無言である。この状況で説明を続けろと？息継ぎがキツイのに！
「つまり！捕え易そうな小柄で可憐で美味しそうなお前を追うのか、筋張って不味そうだが食いでがある私を追ってくるのか、ということだ！」
「師匠のお考えは？」
「師匠じゃないっ！私が奴なら迷わずお前を食う！」
「わかりました。3、2、1」
ゼロはカウントせずに、私は左前方へ、ペトラは右前方へと方向を曲げる。

奴は迷いもせず私を追いかけてくる。ふふふ、そうだろうそうだろう。なんせ私の鞄には奴等のメスの糞が採取してあるからな！

餌より優先するということは、今が繁殖期で間違いなさそうだ。しかし、私はメスではないからなぁ。追いつかれたら確実に餌になりそうだ。

「師匠危ないっ！」
ペトラが警告を放ってくる。

「師匠じゃないっ！」
確かに奴の気配はもうすぐ私に届きそうだな。頃合いか！

走りながら魔法陣を編む。

「風の怒声　――風哮（ふうこう）！」
風の攻撃魔術を放つ。自分の足元へ！

衝撃は私を空中へと跳ね上げる。反動がきついな。

眼下には、私の姿を見失った奴がたたらを踏んでいた。次だ。

「雷よ　捕縛せよ　――放電！」

最弱の雷系攻撃魔術だ。死にはすまい。

失神した奴の傍に着地する。痛たたた・・・。全力疾走で膝に力が入らない。明日は筋肉痛だな。

「と、こうしてはおれん。早速記録せねば！」

鞄から羊皮紙の束を取り出すと、奴をじっくりと観察する。

魔獣、八脚兜鼠（ハッキャクガブトネズミ）。第一前肢、５本指。この形状だと、物を握ることが可能だな。第二前肢、４本指。いや、退化したのかこぶ状の親指があるな。グニグニ。やはり骨がある。第一後脚。形状は第二前肢とほぼ同じ。太さは・・・約１．２倍か？後で全身計測だな。そして主脚。太さが段違いだが、これも第二前肢と形状は同じ。いや、親指の退化痕から骨が突き出してるな。硬質化している。これは骨格の周りにキチン質？ふむ。皮膚が変化したものだろう。腹部にもキチン質か。鱗みたいな模様になっている。一枚採取しておこう。体毛は・・・。尾部は・・・。牙の形状は・・・。

「そろそろ失神から醒めそうだな。瞳孔が閉まり始めている。ペトラ、離れよう」

まだまだ心残りであるが、襲われる前に逃げたほうが無難だな。

「そうだ。忘れない内に記録しておこう。

我の眼に映りしを　我が知の記憶を　ここに記さん　――念写！」

魔法陣の下に置かれた羊皮紙に、私が今調べた八脚兜鼠の記録が焼きつけられているはずである。

「ペトラ、帰ろう」

「・・・・・・」

憮然としているようだ。何か悪いことしたかな？まあいい。体中ガタガタだ。早く帰ることにしよう。

自宅へと帰りついた私は、まず今回の調査資料や採取した部位を整理する。

情報の羅列である羊皮紙は後で別紙にまとめるため文机の上に。殻質や糞、体毛などは一時保管用の皮箱へひとつずつラベルを貼って仕舞い込む。

「これでよし！」

「よしではありません。汚れた外套や上着を脱ぎ散らかさないでください。魔具もきちんと仕舞ってください。出掛けるときになってまた探すハメになりますよ？」

「もう早く帰って飯食って寝ろ！」

「ほらほら、師匠は早く手と顔を洗ってうがいをしてきてください。片付けは私がやっておきますから、さっさと夕飯を作りやがってください」

「師匠じゃない！」

相変わらず私の言葉が通じない。師匠と呼ぶくせに、敬意が全く感じられない。弟子として認めてないから突っ込まないけどな。それになんて言った？夕飯？

「夕飯ならお前の母親が用意しているはずだろう？家族団欒の夕餉に水を差すつもりはないぞ？」

「家族団欒など、今朝も済ませてきたばかりです。それよりもいい歳をして独り寂しく食事を摂る可哀相な師匠に付き合ってあげるのも弟子の務めです」

「師匠言うな。独りではないぞ？ここにはたくさんの愛らしい魔獣達の資料でいっぱいだ！それを愛でながら食う飯は最高だ！」

「師匠、気持ち悪い発言は気持ち悪い性癖として容認しましょう。気持ち悪いですけど。そんな心優しい弟子に早く豪華な夕餉を饗してあげようという師匠魂を見せてください」

気持ち悪いと3回も言いやがった！

私とて、自分がちょっと変わった個性をもっていることは重々承知しているが、誰に迷惑をかけているわけでないのだからそこまで言われる筋合いはないっ！

でも、ダメージ喰らうよなぁ。

「だから弟子をとった憶えは無い！独り暮らしの男の食事は粗食と決まっているのだ。お前が満足する食事を饗する自信がないので、早く帰ってお袋さんの味をたっぷり堪能してくれたまえ」

「何を言っているのですか？食糧庫には私に食べられるべき食材が十二分に揃えられてありました。まあ、本日は遅い時間でもありますから、御馳走でなくても心優しい弟子は許容してあげましょう。さあ、一刻も早く夕餉の支度を済ましやがれです」

うちの食糧庫を把握してやがる。いつ調べたんだ？

「百歩譲って私の食糧庫が必要な量を備えていたとしても、収入の少ない可哀相な独身男性の食糧を食うことに罪悪感を感じないのか？あと、師匠いうな」

「フッ。取ってつけたかのような台詞は漸く弟子と認めたということですね。そうそう罪悪感と言えば、『小柄で可憐で美味しそうな』私があのような鼠ごときに袖にされたのを嬉しそうにしていた方がいらっしゃったと記憶しておりますが、そんな『小柄で可憐で美味しそうな』私の傷心を癒すことで少しでも罪悪感を減らしてあげようという粋な弟子の心意気を師匠はどう思われているんでしょうか？いいからさっさと飯作れ」

ずっと機嫌が悪いと思っていたが、それが原因か！

「どうされましたか？なんなら夕飯の用意は私がさせていただいてもかまいませんが？なんせ『美味しそう』だと言われてしまいましたからね。でも食卓に上る前に身体を綺麗に洗うためのお時間くらいはいただけるのでしょうか？」

服を脱ごうとするペトラの両肩を即座に押さえた。

「あら？調理は師匠自らされるのでしたら、いつでもまな板の上にあがらせていただきます」

頬を染めるな！指を噛むなあああああああああ！

「夕飯の御用意をさせていただきます。是非とも召し上がっていただきたい。急ぎますのでこれにてっ！」

私は八脚兜鼠に追いかけられているときより恐ろしい焦燥感を感じて、食糧庫へと走る。

このままだと捕食されてしまう！

私の本能がそう告げていた。

「手早く済ませないと怖いな。質より量でいくか」
魔術で即座に沸騰させた大鍋に塩と5束の乾麺を入れる。

「昔はあんなに毒舌じゃなく、天使のような子供だったのにな」
麺が茹であがる前に、ソースを用意する。少しでもバリエーションを持たせるために3種類ほど作ろうか。

「あいつも今年で15歳かぁ。早いもんだ」
油を引いたフライパンで、ひき肉とオルニオンのみじん切りを香辛料と塩を加えて炒める。トメィトをざく切りにして絡め、水と魚醤を加え少し煮詰める。

「13の時に冒険者になるって言ったときはびっくりしたもんだったがなぁ」
火から下ろして香草のみじん切りをまぶしてソースがひとつ完成し、木の深皿へ入れる。

「ちっこかったくせに、みるみるランクが上がってったのは凄かったな。心配だったけど」
生活魔術の水洗浄で洗い終わったフライパンを再び火にかける。

「冒険者になってからも魔獣の癖とか聞きに良くきてたけど、まさか弟子入りさせてくれとか言われたのには正気を疑ったもんだ」
塩漬け肉のみじん切りと数種類の茸を乳脂で炒める。小麦粉と水を加えて塩と香辛料を加える。とろみが出たら完成。

「私は冒険者登録したものの、性に合わなくて最低ランクのままだったからな」
自嘲しながら茸ソースも深皿に移す。フライパンを洗浄後、鉤に引っ掛ける。

「魔獣達だって、狩るより有益なことはいっぱいあるんだけどな」

大白烏が無事巣立ったあと、放置された巣には砂金の粒の大きいものや、宝石の原石なんかがそのまま残っていることがある。雛を守るために巣に近づくものには容赦ないが。

牧草を食い尽す水晶角鹿も害獣認定されたのと角が高価であるため狩りの対象だが、彼らは牧草も雑草も食い尽すが、角で掘り返された大地は手を入れずとも耕され、その糞は良質の肥料として土を肥やす。なにより根野菜は食べないからタダで開墾してもらったと考えるならどれだけ有用か。

人族と魔獣はお互いに狩りの対象にしかなっていないが、知恵を持つ人族が魔獣への理解をより深めれば、最低限の争いで相互利益を得られるのではないだろうか？

私は人族全体に問題提起をするほど力があるわけではないし、理想を押しつけるほど傲慢でもない。

むしろ、興味深い魔獣の生態への欲求が行動の源だ。

あっさりと争いを選んでしまう同じ人族に、私の愛でる魔獣達の何がわかるというのだろうか？せめて戦いを選ぶなら、彼らのことを知った上でして欲しい。そんな個人的な感情が自称魔獣博物士と

しての私の願いだ。やはり傲慢だな。

「師匠。そろそろお腹と背中がくっつきそうです。ぐずぐずしていては私の『小柄で可憐で美味しそうな』身体が火を噴きます」

なんという脅迫！意味はわからないがイメージは伝わった！急がねば！

「麺はあと少しで茹であがるから、それまでにこのリタスを千切ってくれ」

「了解です」

無愛想、無遠慮なペトラが少し嬉しそうにして私の横でリタスを千切り始める。

微かな微笑に幼い頃の彼女の面影を見て、私も少し嬉しくなる。

最後のソースは千切ったリタスと紅魚の燻製をほぐしたものに、塩、香辛料とたっぷりの柑橘果汁を搾ったものだ。

「師匠は無駄に独り寂しく長い時間を過ごしているわけではなくて安心しました。短時間でこれほどの料理は正直感服いたします」

「それ褒めてるのか貶してるのかどっちだ？あと、師匠言うな」

ちょっと素直なペトラが可愛く見えた。

## 第1話（後書き）

説明くさい癖を逆手に、説明的でも作品に合うかなぁ？と選んだ題材なのに、会話文に全力を投入してしまった初回です；；

# 第2話

スライム。

私が最も興味を抱く魔獣である。

彼等は世界中いたる所に生息し、その環境に応じて様々な新種変種へと姿を変える。彼等以上に、同種の中でこれ程まで多岐にわたる能力をもつ生物を私は知らない。

特に強くもない不定形のゲル状生物。多くの者にとってはそれだけの認識に過ぎないが、私にとって彼等のことを知る喜びは、子供にとって新しい玩具が詰められたプレゼントの箱を開けるような高揚をもたらした。

私達は今、鍾乳洞を奥へ奥へと進んでいる。湿ってはいるが、気温が低く空気の流れもある。

いくつもの石筍や石柱を避け、分岐ごとに光石を置き、目的の場所へと辿り着く。

灯火の術に照らされたそのあまりに美しく幻想的な光景に言葉を無くしてしまう。

広い空間の中、なだらかな斜面の奥から続くのは、乳白色の数え切れない小さな池。

地中の成分が溶け出しているのだろう。灯火の白光を受けても、水盆の水は紺碧の輝きを放っている。

「新種の目撃があったのはこの辺りだったな」

「そうですね」

美しい景色に眼を離せずにいるが、息の乱れる私と違い、疲れを感じさせない声でペトラが返す。

私がこの洞窟の調査を決めたのは、酒場での会話だった。

冒険者ギルドに、ある魔獣の調査記録を買い取ってもらった私は、久し振りの収入に独り祝杯を挙げることにした。

カリカリに焼いた塩漬け肉と香草の炒め物を肴に、冷たい麦酒を喉を鳴らして飲む。男達の笑い声、女性の艶やかな甘い声、怒声、泣き声。酒場内の様々な喧騒が耳に心地よい。

そんな中、冒険者らしき男が仲間達と話している声が耳に届いた。

「本当にスライムが助けてくれたんだって！」

「そんなわけあるかい。大方、フラフラした頭で薬丸でも飲んだんだろ。だいたい何の得があってスライムが傷を治してくれるんだよ？」

不機嫌そうな男に、仲間のからかう声が飛ぶ。

男達の話に耳を傾けていたところ、どうやら次のような話であるらしい。

男が魔獣との戦闘で負傷し、命からがら逃げ延びた。追ってくる魔獣が何故か入ろうとしない洞窟に隠れられたのだが、傷は深く、治療する体力もなく、死を待つだけだった。

暗闇で偶然手に水が触れ、最後に喉の渇きを癒そうとその水を飲んで横たわっていた。

すると突然身体に何かが這い寄って来た。プルプルした感触からスライムだとわかった。

払い除ける体力も尽き、俺の最後はスライムごときの餌かと思ったらしい。

しかし、強酸を吐こうともせず身体を這い回っていたスライムから、暖かな何かが流れ込んでくると共に男は気を失った。

意識を取り戻した男は、身体の傷が悉く治癒されていたそうだ。

「そりゃ、おめー通りすがりのプリンプリンした巫女さんか治療師が治癒術で治してくれたんじゃねーのか？」

「ちげーねぇ！憶えて無くて残念だったなぁ」

男の仲間達はまるっきり信じてはいないようだ。

私は新たに注文した麦酒を両手に片方を不貞腐れている男の前に置く。

「今の話、詳しく聞かせてもらえるかい？」

こうして今私達は男から聞き出した洞窟にいる。

私は荷の中から空の水筒をとりだし、少しずつ流れ出す水盆の水を採取する。辺りの石筍もナイフで削り取り小箱に採取した。

地面を注意深く観察するが、生き物の糞らしきものがない。しばらく這いずり回ってみたが何も見つからなかった。

珍しいスライムとはいえ、生きている限りは排泄する。その痕跡が全く無いとは、やはり男の勘違いだったのだろうか？

「じゃあ、最後の手段だな。ペトラ、頼むぞ」

「・・・・・・スライムの痕跡は発見できなかったのでは？」

「まあな。しかし、可能性があるなら試す価値はある」

「捜索範囲を広げるべきでは？」

「いや、餌の殆ど無い洞窟の中で、豊富な水場があり、生き物が集まる可能性が高いのはここだ。他の場所を闇雲に探したところで効率的とは言えまい。なので、ペトラ頼む。くれぐれも致命傷にならず、且つ、意識を保てる程度にだぞ？」

そう。男の状況がスライムを惹きよせたかもしれないなら、その状況を模してみるのが最も可能性が高い。

ペトラには適度な傷を与えてくれるよう道すがら頼んであったのだ。

「・・・・・・むぅ」
剣の柄に手を添えたペトラの前に立つ。何故か困ったような顔だ。
「どうした？Ｂランク冒険者のお前なら私の注文は難しくなかろう？治癒術なら私も使えるし、薬丸だって用意してあるから万に一つも危険はない」
服まで斬られるのは嫌だったので、上半身裸になって濡れないように服は鞄の上に置く。
「・・・・・・嫌です」
眼を逸らしたペトラは、常の強い口調と反対の小さな声で言った。
「何故だ？お前の腕なら私が何よりも信頼しているぞ。ああ、見られていてはやり難いか？しかし、背中だとスライムの観察が出来ないからなぁ。身体の前面に傷があるのが望ましいんだ。じゃあ、眼を瞑ろう。その間にちゃっちゃと済ませてくれ」
両手を後ろに組み、眼を閉じて覚悟を決める。
いつまで経っても剣が振ってこない。眼を開けてペトラを窺う。
「どうしたんだ？」
「・・・・・・師匠」
「師匠じゃない。なんだ？」
「私は心に決めていることがひとつあります」
今はそんな話聞いてないんだが、声が怖いので耳を傾ける。
「私が師匠に刃を向けるときは、生涯に一度と決めております」
「私を脅すときに剣振り回したりしてなかったか？あと、師匠言うな」

素直に疑問を口にする。

ちょっとからかったりしたときなぞ、耳を掠めて髪を何本か持っていかれたこともあったぞ？

「・・・・・あれは愛情表現です」

「刃物振り回すのが愛情？」

力強く頷きやがった。どんな歪んだ愛情なんだ？怖いぞ？

「今回のは師匠の肉を斬り裂けとのこと」

「なんか無事に済みそうもない表現だな」

「私が師匠の肉体に刃を突き立てる。それは一生に一度。師匠を一太刀で殺すときだけ！と自らに誓いを立てております」

「怖ろしい誓いを立てるんじゃない！私はなんて弟子をもったん・・・いや、弟子じゃないが、わ、私が何かしたのか？そんな怖いペトラに背中を任せられなくなるじゃないか！」

「師匠の背中を守るのは弟子である私の務めです。この役目は誰に譲る気もありません」

「弟子をとったおぼえは無い！まったく・・・。それで誓いの理由は聞いても？」

「申し訳ありません。師匠を殺す瞬間にしか言うつもりはありません」

「やめろ！わかった！もう何も聞かないから！あと師匠言うな」

私があやして可愛い笑顔を見せていた天使がいつの間に・・・。

今、下手な発言をすると間違いなく殺されそうだ。次の手を考えよう。

「うーむ。どうするかな。自分で自分を刃物で斬るなんて怖いことは出来そうもないし・・・。

仕方ないな、風よ　断て　――風刃(ふうじん)」
魔法陣を裏表逆にして発動させる。初歩攻撃魔術だし、死ぬことはないはずだ。

「師匠っ！」
ペトラが叫ぶが、私はそれに気を取られている場合ではない。顔面と首を腕で庇い、前身でカマイタチを受け止める。痛い痛い痛いっ！あと師匠言うな。

「全く！馬鹿だ阿呆だ間抜けだとは思っていましたがこれほどとは！」
「今回は仕方ないだろう？」
「毎回駄目ですっ！」
「血で汚れるぞ。それに自分で歩ける」
「煩い、黙れ」
血が付くのに構わず、私の腕を自分の肩に乗せ、身体を支えてくれる。

鍾乳石で出来た美しい水盆から、神秘的な色の水を掬い取り口に運ぶ。

やはり、なんらかの成分が溶け出しているようだ。普通の水より硬い。

「後は寝て待つか」
ひんやりとした固い石床が、傷で火照った身体に心地よい。

不意に頭が持ち上げられ、柔らかいモノが後頭部に当たる。ペトラが膝枕をしてくれたようだ。上目で窺うと、

「こちらの方が観察が楽です」
確かに傷だらけの自分の身体が見える。しかし、嫁入り前の若い娘に膝枕とは流石に気が引ける。ペトラの両親に知られたら追い回されそうだ。

後ろめたさと気恥ずかしさに、ついつい頭を浮かせて腿にかかる重量を減らす。

「ぐっ」
顔を鷲掴みにされて腿に押しつけられた。怖い顔で睨まれている。

「すまないな。少し休ませてもらう」
降参だ。力を抜き、ペトラに頭を預ける。

このまま昼寝でもしたいところだが、痛みがそうはさせてくれない。止血していないので長時間は無理だな。

呼吸が浅く早くなり、そろそろ限界か？と思われたとき、それは現れた。

何処に身を潜めていたのだろう？気がついた時には私の足先近くにいた。

半透明のゲル状。水滴が弾けずに震えながら近づいてくる。色合いは乳白色、いや、真珠のような輝きもある。傷の痛みも忘れ、見惚れてしまう。おおう！冷たい！這いのぼってきたスライムは気温とほぼ同じくらいか。他のスライムと同じく変温のようだ。重さは結構あるな。７０キロから７５キロくらいだな。重さが面で掛かっ

てくるから、そんなにきつくはないな。ふむ、傷を舐めているのか？少々くすぐったいな。半透明の身体を通して視認できる範囲では、血は食料として摂取しているようだ。痛みが緩やかになったということは、麻酔成分でも分泌してるのか？しかし、感覚が鈍るわけではないし、痛覚だけを麻痺させるのか。お、傷口が塞がっていく。魔力も吸われているな。魔力も食糧なのか、治癒に必要なのかどちらだろう？

全身の傷を完治させてくれたスライムは、地に落ちた私の血も綺麗に吸収して、鍾乳石の裂け目から姿を消した。

水が流れ込んでいる裂け目の奥に住処があるのだろう。水を飲んだときに混じった私の血や汗に反応したのだろうか？

着衣を整えた私は、スライムが動きまわったあとを丹念に調べてみたが、何も見つけることはできなかった。私の血を餌として摂取したことから、糞が見つかるかと思ったのだが、残念だ。消化効率が良いのか、水場では排泄しないのか。吸われた魔力は、治癒術を使った場合のそれより少し多いくらいだった。スライム自身が吸収した魔力は微々たるものなのではないだろうか？

次々に疑問が浮かび、好奇心が抑えきれない。だが、彼は確かに存在したのだ。あの不思議なスライムに次会うのが楽しみでならない。そのためにはまた自傷せねばならないのはちと気が重いが。尤も、彼のことをもっと知れば、そんなことをしなくても会えるようになるだろう。

「はぁ。プルプルしたい」

「この変態」

無意識の呟きに手酷い突っ込みが入る。

私を斬り殺すとか怖ろしい誓いをたてている奴に言われたくないが、この話題は禁句としておこう。まだ死にたくない。

命名『パールスライム』

私の調査書にはそう記されている。

## 第2話（後書き）

この話を始めてやりたかったネタを早速使ってしまいました。
まだまだスライム不足なので、またやるかもしれません。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4951u/

アースフィアの博物学士（自称）

2011年7月3日22時14分発行